



善導寺境内遺跡

第3・4次調査概要報告書

久留米市文化財調査報告書 第261集



2008.03

久留米市教育委員会

序

久留米市には、筑後川や水縄山地がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けて暮らしてきた先人達が積み重ね、創造してきた生活・文化遺産が数多く存在しています。

本書で報告する善導寺境内遺跡は、創建以来800年有余年と市内有数の歴史を誇る古刹、浄土宗大本山善導寺に所在する重要文化財大庫裏他6棟の建造物保存修理事業に伴い発掘調査を行ったもので、第3次調査は本堂と広間を結ぶ渡り廊下の基礎工法調査、第4次調査は大庫裏を始め境内の主要建造物の大半が焼失した延享5年（1748）の火災の後、寛延2年（1749）に竣工した大庫裏の付属建造物である釜屋の地下遺構調査を行っています。

本書はその発掘調査成果の概要を収録していますが、本書が埋蔵文化財の理解・普及に寄与し、生涯学習や学術研究の資料として活用されますことを願うと共に、今回の調査に対し、御理解・御協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成20年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集充

例 言

1. 本書は、久留米市善導寺町飯田所在の善導寺境内遺跡第3・4次調査の概要報告書である。
2. 調査は、重要文化財の善導寺大庫裏他6棟保存修理事業に伴い、宗教法人善導寺代表役員阿川文正と久留米市長江藤守國との契約に基づき、受託事業として実施したもので、発掘調査から報告書作成に至る費用は、宗教法人善導寺が負担した。
3. 発掘調査は、久留米市文化観光部文化財保護課の水原道範が担当した。現地調査は第3次調査を平成18年11月20日より同年12月20日まで、第4次調査を平成19年4月4日から同年6月1日の期間で実施した。整理作業は平成19年5月1日～同年6月30日の期間に実施した。
4. 本書に掲載した遺構の実測図は水原の他、緒方智恵子が作成し、図面の浄書は水原・畠中和子、写真撮影は水原が行った。
5. 本書の遺構実測図は日本測地系第Ⅱ座標系（旧座標系）を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
6. 本書中の遺構略記号は、S D・・・溝、S K・・・土坑、S X・・・その他の遺構、S P・・・ピットを示す。
7. 善導寺境内遺跡の略記号はZ N K、調査番号は、第3次調査が200620、第4次調査が200701である。
8. 本文中に記した6桁の数字は、本市文化財保護課における遺物登録番号で、調査番号を省略して表記している。
9. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
10. 本書の執筆・編集は水原が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 第3次調査	4
IV. 第4次調査	8

I. はじめに

1. 調査に至る経過

浄土宗大本山善導寺は、承元2年（1208）の開創と伝えられ約800年の歴史を有する寺院である。現在善導寺境内は、延享5年（1748）の寺域の大部分が火災によって焼失し、その翌年から明和元年（1764）までの間に再建された本堂・大庫裏・釜屋・広間・書院・役寮及び対面所の建物群を中心に寺域が構成されているが、上記の建物のうち、先に修理を行った本堂を除く建物群は約250年の歳月を経て老朽化が進行し、平成15年から同24年までの計画で、文化財建造物保存修理事業が進行している。

善導寺境内遺跡の調査は、その保存修理事業に伴う発掘調査で、平成17年6～10月に大庫裏地下遺構を対象として実施した第1次調査を皮切りとして、第2次調査は大庫裏の北西に隣接する中蔵とそれに先行する役寮及び対面所建物を対象とした基礎工法調査を平成18年1月～同年2月の期間に調査を実施した。本書に収録した第3次調査は平成18年11月20日～同年12月20日の期間に実施した本堂と広間を結ぶ渡り廊下、及び昭和初期まで使用されていた便所部分の基礎工法調査である。

第4次調査は平成19年4月4日～同年6月1日に実施した釜屋部分の地下遺構調査である。ここは平成16年度の釜屋建物解体の際に、財団法人文化財建造物保存技術協会九州支部重要文化財善導寺設計監理事務所（以下文建協と略記）によって基礎工法調査が行われ、明治時代の煉瓦製カマドを除去した後に、その地下から寛延2年（1749）の釜屋創建期～明治改修期に使用されたと想定される半地下式の石組みカマドが検出されていた。今回の調査はそのカマドを始めとする地下遺構の検出を目的として実施した。

2. 調査の体制

本調査に係る組織体制は以下のとおりである。

調査委託：宗教法人善導寺	代表役員	阿川 文正		
調査主体：久留米市教育委員会	教 育 長	石川 集充		
調査総括：久留米市文化観光部	部 長	緒方 眞一		
	次 長	辻 文孝		
文化財保護課	課 長	関 知彦		
	課長補佐兼課主査	立石 雅文	山口 淳	
	事務主査	松村 一良	大石 昇	（平成18年度まで）
		近澤 康治		
	調査庶務	本庄 ともえ		
	調査担当	水原 道範		

発掘調査臨時職員

井上登志男・宮崎文利・溝上国男・堀田秀美・芳野ヒサコ・緒方智恵子・小西富美子・石井紀美子
大熊澄子・上野ヒデ子・大塚ヒロ子・田中トシ子・石井弘子・熊谷秋子・吉弘エミ子・江藤 敏
塚本恵子・田中裕子・小野和子・城 幸子

出土遺物整理臨時職員

山ノ内文子・村吉あゆみ・緒方梨奈・山田広幸

Ⅱ．遺跡の位置と環境

本遺跡は久留米市東部の善導寺町飯田550番地に所在する。ここは筑後川左岸に形成された標高12m前後を測る微高地の北端部に位置するが、遺跡のすぐ北東側には享保10年と昭和7年に着工した捷水路工事によって直流化するまで筑後川の旧河道が大きく蛇行し、さらには支流の巨勢川との合流点でもあったことから度々洪水の被害を受けていた場所である。

調査地の周辺には自然堤防が発達し、その自然堤防上には本遺跡を包括する善導寺遺跡の他、多くの遺跡が所在することが知られているものの、発掘調査に至った例は少なく、詳細は不明な点が多い。

縄文時代については、本遺跡の約1.0km西方にあり過去5回の調査が行われた木塚遺跡において、遺構は未検出であるものの、前期の縄文式・曾根式土器、晩期の土器や黒輝石石鏃などの石器類が多数出土した。

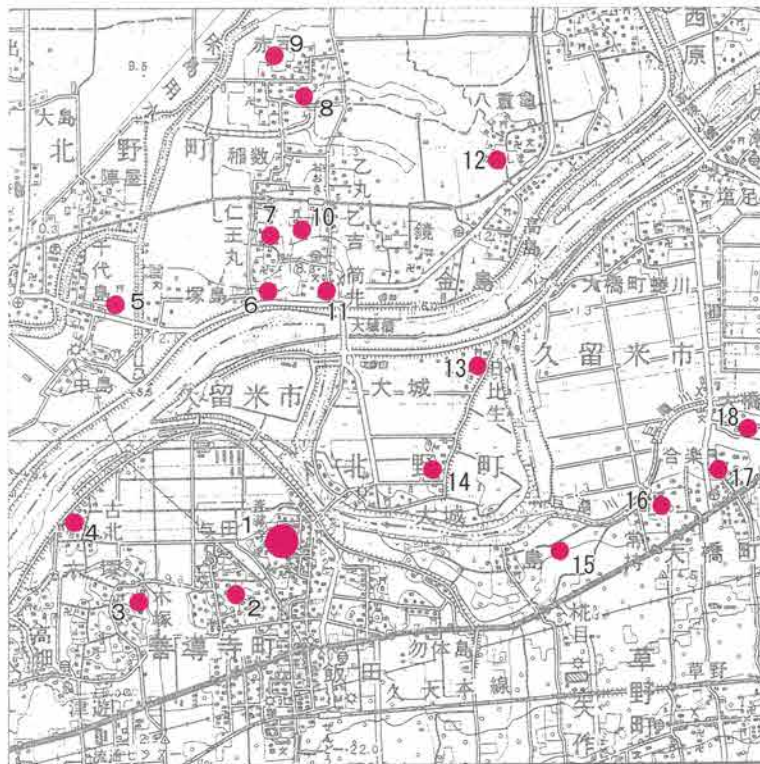
弥生時代の遺跡は、木塚古墳の下層で前期板付Ⅱ式の小壺が副葬された土壙墓2基や木棺墓2基、石棺墓6基が検出された。その他、本遺跡の北東約1.8kmの日比生遺跡は、現在福岡県立九州歴史資料館が保管する銅矛の出土地と伝承されている。また、本遺跡より約2.0km北東にある筑後川右岸の自然堤防上では、前期の墓地や中～後期の集落遺跡の金島今寺遺跡、中期の集落・墓地が調査され朝鮮系無文土器が出土した仁王丸遺跡、中期の集落と支石墓1基が検出された塚島遺跡、中期の甕棺墓68基や石棺墓20基、祭祀土坑4基が調査され、植物珪酸体分析によって水田の存在も推定された大城中筒井遺跡がある。

古墳は南方約3kmの耳納山地北麓に多数分布するが、自然堤防上には少ない。木塚古墳は初期横穴石室を持ち、5世紀後半と考えられる古墳である。同台地上に本村1～4号墳、堂前古墳が存在したが、木塚古墳以外は現在消滅した。筑後川右岸には後期の複室構造の横穴式石室を持つ塚島古墳1基が知られているが、仁王丸遺跡にも塚があったと伝えられている。生活遺跡としては本遺跡の東方約2kmに所在する格屋敷遺跡で、溝1条、土坑1基が検出された。

奈良・平安時代の状況については不明な点が多い。但し、周辺には山本郡条里の痕跡が明瞭に認められ、また耳納山地北麓には千光寺や永勝寺など、この頃に創建されたと伝えられる寺社が多く所在する。

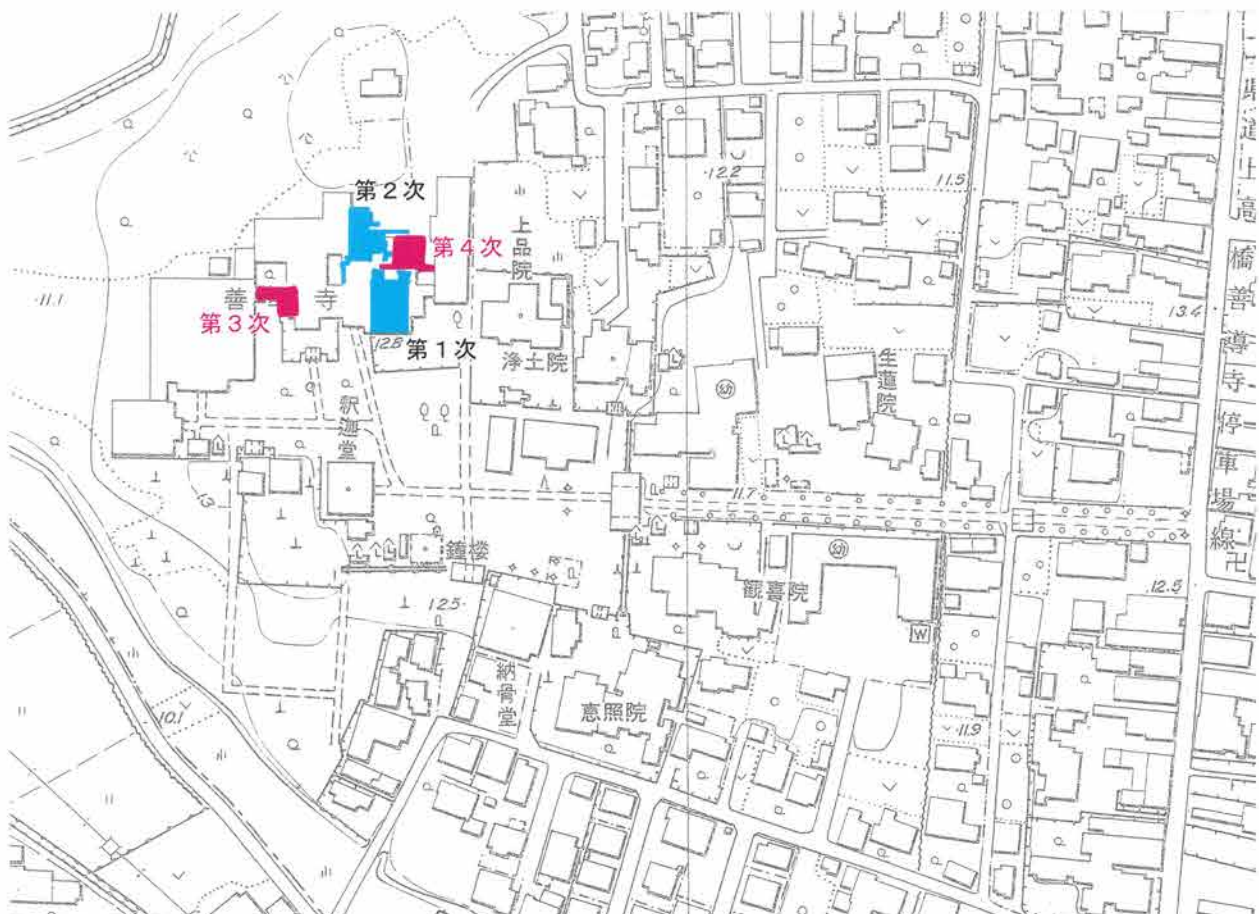
中世には、平安時代末期に肥前国高木から土着したと伝わる草野氏の一族、草野永平が平家討伐の行賞によって筑後国在国司・押領使両職を勤め、以後筑後の有力な国人として繁栄していた。草野氏は寺社の保護を積極的に行い、その勢力圏には善導寺の他にも大伽藍を有した寺社が多数存在したが、戦国末期の争乱や草野氏の滅亡により衰微した。近世以降は農村、また日田街道沿いの在郷町・門前町となっている。

浄土宗大本山善導寺は、草野永平が大壇越となり、浄土宗開祖法然上人の後継者として浄土宗2世を勤めた弁長（鎮西上人・聖光上人）を招いて、承元2年（1208）に開創したと伝わる古刹である。約800年の長い歴史の中では、南北朝期や戦国期などには伽藍を失うなどの盛衰を繰り返しながらも、今日まで広大な寺地と多数の歴史的建造物が維持されている。現在残る最も古い建造物は慶安4年（1651）建造の大門であるが、本堂・大庫裏・釜屋・広間・書院・役寮及び対面所は延享5年（1748）の寺内の大部分が焼失した火災の後、寛延2年（1749）から明和元年（1764）の20年間をかけて再建された。この建造物群は約250年前の寺院建築を伝えることから、国指定重要文化財に指定されている。寺内には建造物の他にも、仏像や絵巻物、弁長の手植伝承を持ち樹齢800年とされる大楠や菩提樹などの美術工芸品や天然記念物があり、市内で最も多く国・県・市指定文化財物件を所有している。



1. 善導寺境内遺跡
2. 与田遺跡
3. 木塚遺跡
4. 古北遺跡
5. 千代島遺跡
6. 塚島遺跡
7. 仁王丸遺跡
8. 赤司城跡
9. 良積遺跡
10. 金島今寺遺跡
11. 大城中筒井遺跡
12. 中木戸遺跡
13. 日比生遺跡
14. 土居遺跡
15. 格屋敷遺跡
16. 常持遺跡
17. 合樂遺跡
18. 大橋内畑遺跡

第1図 善導寺境内遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 善導寺境内遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

Ⅲ．第3次調査

a) 調査の方法と経過

第3次調査は、本堂と広間を結ぶ2間×7間瓦葺の渡り廊下、及び昭和初期まで使用されていた便所部分を対象とした広間西面の基礎工法調査である。建造物解体材の保管庫と修復作業場を確保するため、ここに2階建てプレハブを仮設することとなり、その部分の遺構の存在状況を把握するため、渡り廊下・便所建物の解体後に基礎工法調査を実施した。

調査は平成18年11月20日より開始し、まずは、先日解体された渡り廊下の礎石を清掃し、土間を精査する作業を開始した。その後、現表土とその下にある焼土を多量に含む褐色土を約10cm掘り下げたところ硬く締まった面が検出された。その面を全体に掘り広げ、前身建物の礎石や東端部では叩きが施された面を検出した。さらに北側礎石列に沿って東西方向にトレンチを設定し、約70cm掘り下げている。

便所部分は、まず置かれていた瓦礫類の除去と清掃を行い、その後掘り下げを行ったところ切石を並べた基礎や漆喰貼りされた床面、陶器の大甕を使用した便槽を検出した。最後に廊下玄関の存在を確認するため調査区を拡張し、その柱穴と考えられる遺構を検出。それらの実測作業を終了した同年12月20日に現地作業を終了した。

遺構の記録は、渡り廊下の北端部礎石の東西中軸線を基準として方眼を設定、1/20の遺構配置図を作成。写真記録は6×7判のモノクロ、同カラーリバーサル写真を撮影した。



第3図 第3次調査全景（南から）



第4図 第3次調査遺構配置図 (1/100)

b) 検出遺構

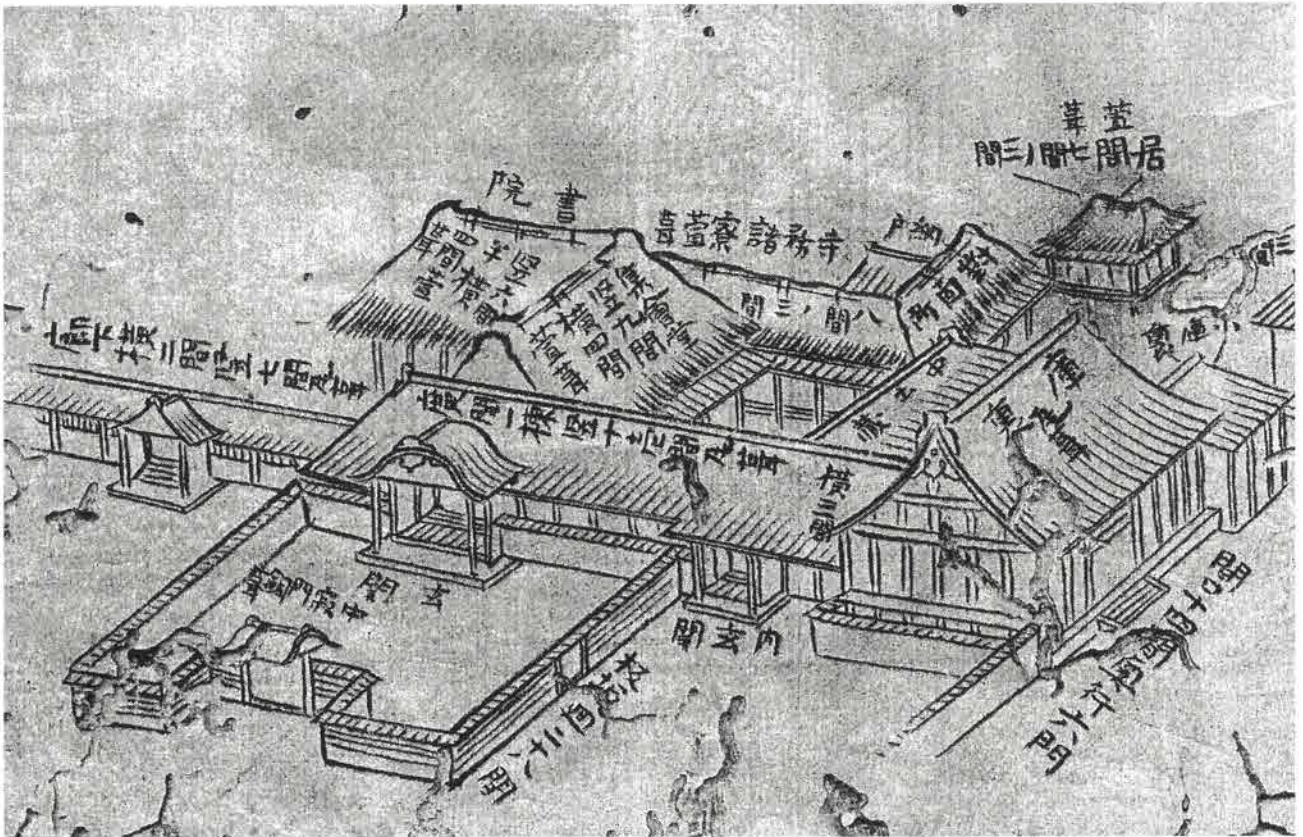
礎石

渡り廊下部分の表土から約10cm掘り下げた暗褐色土面で礎石を23個検出した。現渡り廊下礎石の下で検出されたものが多く、その前身となる渡り廊下に伴う礎石と判断されるもので、前身渡り廊下も現状とほぼ同じく幅3.5mであったと推定される。北西部には雨落ち溝状に並ぶ石も検出されている。

叩き

渡り廊下と広間の接続部付近で検出。広間の壁面から約2.5m本堂側までの範囲で検出された。文建協の教示によると、広間の柱には階段が取り付けられていた痕跡があり、広間の建築当初、広間から本堂へ向かうためには一度階段を下りて地面へ立つ必要があったと考えられるとの事であることから、そのため叩きがなされていたと想定される遺構である。

SP1・2 (第6図) 渡り廊下の西側から3・5番目の礎石に沿って調査区を拡張したところ、礎石の並びに沿って礎石の根石と考えられる小礫が詰まったピットを検出した。渡り廊下南礎石列とは西側のSP1が約1.1m、東側のSP2が1.2mとその心々距離に違いがあるが、恐らく廊下から張り出した付属施設が設けられていたと考えられる。



第5図 『明治15年 伽藍取調書』

溝

SD3 (第6図) SP2の北東側で検出。長軸1.2m、幅30～50cm。内部には小礫や瓦の破片が詰められている。前身渡り廊下に伴う雨落ち溝と考えられる遺構。

SD4 (第7図) 調査区北東部において先に述べた叩きを除去した後に検出。幅40～60cm、深さは2～5cmを測る。広間の前身建物に伴う雨落ち溝と推定される遺構である。

便所 (第8図)

昭和初期まで使用されていた遺構であるが、上屋は早くに解体されて失われ、この場所は調査開始時点では瓦礫置き場となっていた。

渡り廊下から全面に漆喰塗りされた床面へ一旦降り、その南面の西側に大用所、東側に小用所が設けられた便所である。東側の男性用小用槽は長さ90cm前後、幅20cm前後の凝灰岩の切石を長方形に並べて南北70cm、幅1.8mの区画を造り、北側の切石を踏み石とする。便器は用いられず、切石で区画された内部は両端部を高く、中央部を最も低くして溝状に漆喰が塗り込められ、小水は中央部から南側切り石の下を通り、外側に埋め込まれた陶器製大甕へと排出される構造である。西側の大用は小用と同様に、切石を並べた内部に陶器製大甕を2基埋設していることから、2室に分かれていたと見られる。さらに床には漆喰が塗られている。大甕は口縁を南側へ傾けて据えられ、汲み取りは南外側から長柄杓を用いてなされていたと考えられる構造である。

また、床面の漆喰を除去した後、小礫や瓦細片を詰めた礎石除去後の根石と見られる遺構を検出した。これにより便所も1度造り替え、もしくは改修を受けていることが判明した。



第6図 拡張区検出遺構全景（西から）



第7図 SD4（南から）



第8図 便所検出状況（南東から）



第9図 SX5全景（北から）

不明遺構

SX5（第9図） 渡り廊下の叩きを除去した後に検出。主に平瓦を直径約90cmの円形に立て並べた遺構。同様の遺構は大庫裏玄関部や第2次調査の中蔵基壇東面石垣の下で検出されている。その用途は判然としないが、雨水などを地下へ浸透させるためのものであろうか。

c) 出土遺物

国産陶磁器、瓦類、銅製品、銭貨、鉄製品など、江戸時代後期～大正時代の遺物がパンコンテナー1箱分出土した。瓦類以外で最も多く出土したものは銭貨である。江戸時代の寛永通宝24枚の他、北宋銭の元豊通宝、明治20年製一銭銅貨が各1枚ある。銭貨は主に表土中から出土している。

d) 小結

今回の基礎工法調査では、現状渡り廊下の前身となる建物礎石や便所遺構を検出。善導寺に残された『明治15年伽藍取調書』（第5図）のみに描かれ、存在が疑問視されていた廊下玄関の痕跡を検出し、現渡り廊下には玄関が取り付けいていた痕跡はないことから、建設時期が不明であった現渡り廊下は少なくとも明治15年以降に建設されたものであることが判明する成果が得られた。

IV. 第4次調査

1. 調査の方法と経過

第4次調査は、大庫裏の付属施設である釜屋の地下遺構の調査である。

釜屋は延享5年(1748)の大火災の後、早くも翌寛延2年(1749)の大庫裏再建時に同時に竣工した建物で、大庫裏の地下遺構を調査した第1次調査の成果から、それまで大庫裏内部に設けられていたカマドを大庫裏の外へ設置するため新設されたと考えられる建物である。桁行6間(11.9m)、梁間4間(8.0m)の規模を持つ切妻造りの瓦葺建物で、南面は大庫裏に接続している。

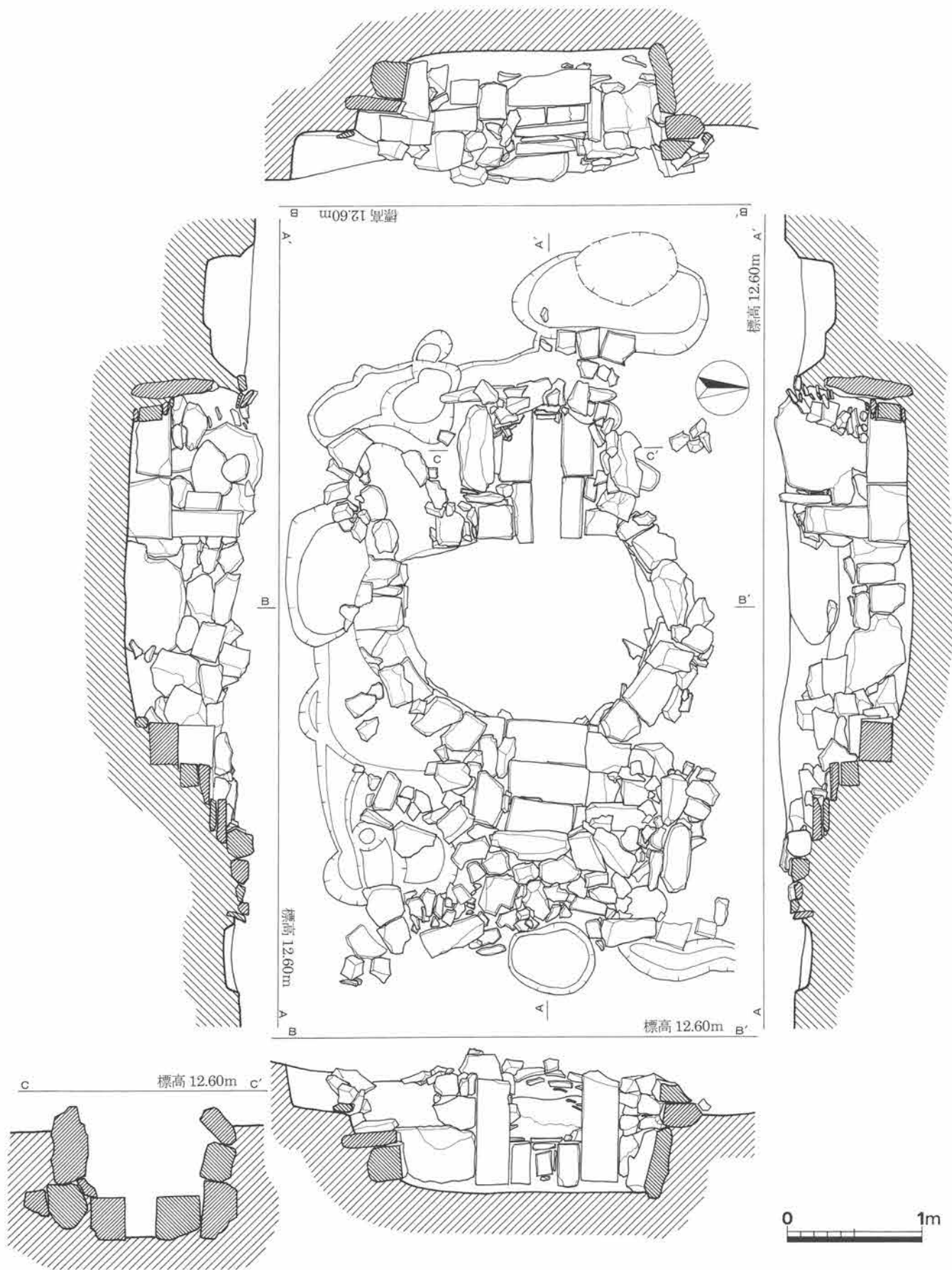


第10図 再組立中の釜屋（北東から）

ここでは平成16年度に行った建物の解体時の基礎工法調査の際に、明治期に造られた煉瓦造りのカマドを除去したところ、それに先行する大規模な石組みカマドが発見されていた。今回はその石組みカマドをはじめとする地下遺構の検出を目的として、平成19年4月4日より発掘調査を開始した。以下調査日誌から抜粋する。

- 4月4日 基礎工法調査後に埋め戻されたバラスや真砂土を地下遺構に影響が及ばないように人力で除去し、基礎工法調査終了時の状態に戻す作業から開始したが、大庫裏組み立て作業時に大型重機がこの上に乗り上げて作業が行われていたことなどから、埋め戻し土・バラス等は非常に固く締まり、その除去作業は大変難渋した。
- 4月23日 ようやくカマドの埋め戻し土を完全に除去し、上面検出遺構の遺構配置図作成を開始する。
 - 25日 カマドの実測作業を開始。文化庁豊城浩行調査官の現地指導(～26日)を受ける。
 - 27日 上面遺構の調査を終了。
- 5月7日 南半部の床面叩きを除去し、掘り下げる作業を開始した。
 - 9日 調査区を南へ拡張し、釜屋南東隅基壇石垣を検出。さらに明治改修時に東側へ拡張された基壇石垣も一部検出した。以後は掘り下げと実測を連動して行い、コンクリート基礎が埋設される表土から70cmの面まで掘り下げた。
 - 24日 南半部で下層石組み溝を検出し、実測作業を行う。
 - 28日 北半部下層遺構の調査を開始。
- 6月1日 調査区を拡張して下層土坑2基を掘り下げる。最後に写真撮影と実測作業を行い、発掘機材を撤収して現地調査を終了。

遺構実測は、主に日本測地系第Ⅱ座標系(旧座標系)を用いて1/20で行い、適宜1/10の個別実測図を作成した。写真記録は6×7判のモノクローム、及びカラーリバーサルフィルムを使用し撮影した。整理作業は5月1日～6月30日の期間に実施した。



第12図 SX51 実測図 (1/40)



第13図 第4次調査上層全景（南東から）

2. 検出遺構

a) 上層検出遺構

カマド

S X 51（第12・14図） 調査区北部で検出。基礎工法調査の際に検出されたカマドである。

周辺や内部が既に掘下げられている他、北側は基壇石垣増設時に攪乱されているため、掘り方は明瞭にできなかったが、地面を約1m掘り下げ、平面形が円形に石組された半地下式のカマドで、西側に2室の燃焼室、東側には3段の階段を設けている。燃焼室内も石組が使用される。石組は北室の焚口と基底部にのみ凝灰岩や砂岩の切石を用い、その他は安山岩や片岩の割石や自然石、さらには寛永8年（1632）銘の久留米藩士渡辺八左衛門妻女の片岩製板碑も用いられている。

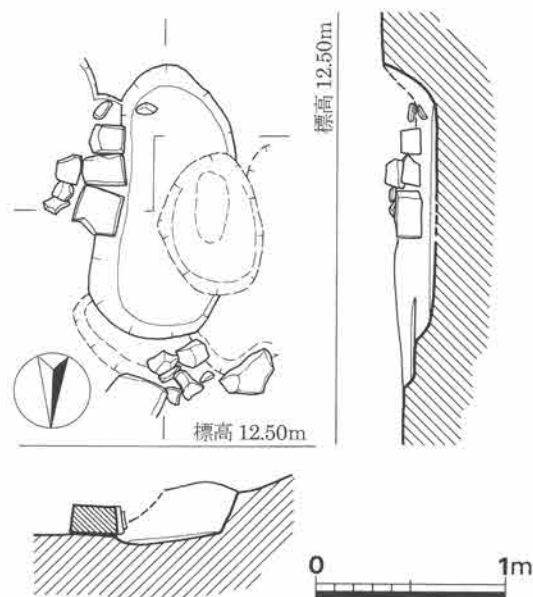
燃焼室の規模は、北室が幅90cm・奥行き共に約1.0m、深さは95cm。南室は底面よりも一段高く造られ幅約60cm、奥行き95cm、深さ55cmを測るが、石は上部にのみ使われている。掘り下げを行った基礎工法調査時には燃焼室内部は2室共に白色の灰が充満していたとされ、壁面は著しく赤色化していた。このカマドは当初の姿そのままではなく、改修を受けたと見られ、石組の状況などから南燃焼室は後の改修時に増設されたと考えられるほか、石組壁面の石材やカマド周囲の床面に敷き詰められた石材には、本



第14図 S X 51 全景（北から）

来燃焼室内部に用いられていた石材と考えられる被熱した石が散見される。善導寺の記録には、天保3年（1832）にカマドを補修した記録が残り、その際に石材が積み直されたと考えられる。

S X 52（第15・16図） S X 51の西側に隣接して設けられた小カマド。長軸1.1m前後、幅55cm、深さ約20cm。これも完掘されていたため詳細は不明であるが、南側に奥壁の石材が僅かに残ることから焚口は北側に開口していたと見られる。東側には一辺20cm前後の方形の切石が3個並び、これが框石の一部と判断される。



第15図 S X 52実測図（1／40）



第16図 S X 52 全景（南から）

S X 53 S X 52が後に改修されて2室構造となり、焚口の向きも南向きへと変更された小カマド。今回の調査時には基底部の痕跡しか残存していないため詳細は不明。

S X 54～56（第17図） 基礎工法調査時に釜屋土間で検出され、臨時カマドと想定された3基の地床炉。平面形は長軸90～120cm、幅80cm前後の楕円形。これも今回調査時には基底部が残存するのみであるため詳細は不明。S X 56は床が著しく焼土化していた。



第17図 S X 54・55 基底部（南東から）

土坑

S K 19 調査区南西部で検出。第1次調査X19の北側延長部の遺構である。第1次調査時点では大庫裏北側廊下の床下に大量に19世紀代の遺物を廃棄した遺構と想定していたが、今回土坑と判断できたため遺構略号を変更した。北端部は攪乱により失われるが、第1次調査時と同様に大量の瓦類や19世紀代の陶磁器が出土している。

S K 57（第18図） 調査区南東部で検出。西側の一部は基礎工法調査時の試掘トレンチにより失われるが、平面形は直径約1.1～1.3mとやや楕円形気味となる土坑。深さは40cm。底面は平坦で、埋土は締りの弱い暗褐色土。



第18図 S K 57 完掘状況（北東から）



第19図 S K 58 全景（南から）

基壇石垣

西面・北面基壇 釜屋解体前には3段と考えられていたが、基礎工法調査により4段であることが判明した。基礎に針葉樹と見られる直系10cm前後の木材を敷き、その上に石垣が組まれている。西面は約3m分が残存、北面基壇は当初約9mであったが、明治期の改修によって釜屋を東側へ拡張するため、石垣も改修され東側へ更に延びている。北西隅部にのみ切石が使用されている。

南西部石垣 大庫裏東桁行よりも釜屋東桁行側が1間分東側へ張り出しているため設けられた石垣である。当初からの約1m分と明治後期の改修時に東側へ延長された石垣の約2.5m分を検出したが、それより東側は攪乱により失われていた。片岩を積んだ石垣で1段～2段分が残存する。

東面石垣 今回の調査によって検出された明治改修以前の東面石垣。北面石垣から折れて南へ延びる約6m分が残存する。これも石材は主に片岩を使用し、1段分が残存する。

b) 中層検出遺構

現釜屋の土間を除去後、すぐに検出した遺構を中層検出遺構とした、土坑1基、石列1が検出された。

土坑

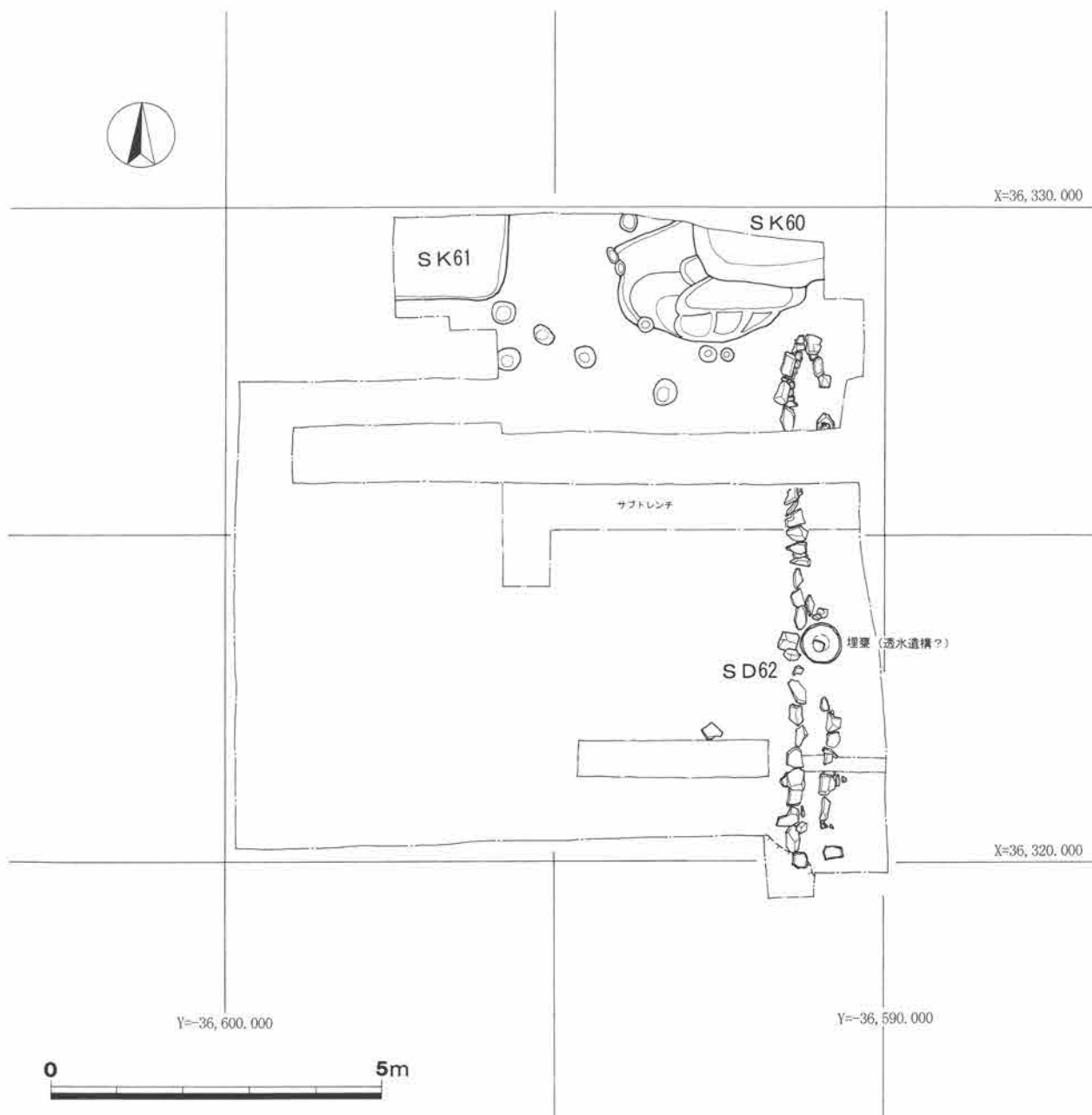
S K 58（第19図） 平面形が南北90～110cm、東西110～130cmの台形を呈する土坑。深さは約30cmで、底面は平坦。検出面ではこの土坑の近辺で焼土や炭化物の塊が集中して検出され、褐色土のS K 58埋土にも焼土や炭化物が多量含まれていた。埋土締りは非常に弱い。巴文軒丸瓦や軒平瓦など瓦類が多量出土し、延享火災の廃物処理をした土坑と推定される。

石列

S X 59 調査区中央部で検出。長さ30cm前後の主に片岩が約1m分東西方向に並べられていた。その性格は不明である。



第20図 上層調査風景（北東から）



第21図 善導寺境内遺跡第4次調査下層遺構配置図 (1/100)

c) 下層検出遺構

コンクリート基礎が打設される表土から約70cm掘り下げた面で検出した遺構群を下層検出遺構とした。下層からは、溝1条、土坑2基、ピット10基を検出した。

溝

SD62 (第24・25図) 調査区東端部で検出した南北走行の溝。南側は調査区外へのびているが、8.2m分を検出した。幅40cm前後の片岩を並べて溝を造る。石は1段分のみが検出された。東側の石組が失われた部分が多いが、幅は40cm前後。底面のレベルは北側から南側へ向かって低くなっている。

中央部には土師質の大甕が埋められている。当初トイレ等と考え掘り下げたが、大甕の内部は直径5mm前後の細かい粒状の焼土や炭化物が充満し、さらに大甕の底部は西側半分が欠損しているが、付近に破片は出土していないことから、底部の一部を抜いて埋置されたと見られる。また、内面には付着物な



第22図 調査区東半部土層状況（南西から）



第23図 下層調査区北半部全景（東から）



第24図 S D 62 南半部全景（南から）



第25図 S D 62 埋甕全景（北東から）



第26図 S K 60 全景（西から）



第27図 S K 61 全景（東から）

ではなく、このことにより、この大甕はトイレなど水分を溜めることを目的とした埋甕ではなく、溝を流れた水を地下へ透み込ませることを目的とした透水施設と推定している。

土坑

S K 60（第26図） 調査区北東部で検出。S X 51よりも先出する土坑である。遺構は調査区外へ延びているが、南北約70cm分、東西約2.0m分が検出された。深さは70cm。底面は平坦。

S K 61（第27図） 調査区北西部で検出。遺構は調査区外に延びているため全容は不明であるが、平面形が方形、もしくは長方形を呈するものと推定される。南北1.3m分、東西1.8m分を検出した。深さは25cm。底面は平坦。埋土は明褐色土の直径1～3cm程のブロック土が多量混入した黒色土で締りは極めて弱く、埋土中からは遺物は全く出土していない。

d) 出土遺物

近世～近代陶磁器、瓦類、土師器、土師質土器、輸入陶磁器、銅製品、石製品などパンコンテナー2箱分の遺物が出土した。その大半はS K 19から出土した18世紀後半代～19世紀代の国産陶磁器と瓦類である。

e) 小結

今回の調査では寛延2年(1749)釜屋の新設時に築造されたカマドが検出された。ここで第1次調査成果も合わせて整理すると、第1次調査の概報において報告したとおり、江戸時代初期には大庫裏の南半分の土地だけが北側よりも一段高く、そこは東西棟礎石建物が建てられ、境には石垣が組まれていたが、寛永期に北側を嵩上げて平坦面を広げ、現在の大庫裏とほぼ同規模の大庫裏が建造されている。

寛永年間以降の大庫裏の変遷を見ると、古い順に

- ①寛永2年(1625)建立の大庫裏(梁間6間×桁行9間)
- ②天和元年(1681)再建大庫裏(梁間6間×桁行8間)、→延享5年(1748)3月焼失
- ③寛延2年(1749)に再建された現在の梁間6間×桁行8間の大庫裏

の変遷が判明している。

その付属施設であるカマドに注目すると、大庫裏の北端部で検出された2室構造の半地下式カマドS X 1と、それに先行する5室構造の半地下式カマドS X 2、S X 1よりも先行し床面の一部のみが残存していたS X 28の3基が検出された北カマド群、及び大庫裏南東側で検出され、S X 6→S X 5→S X 4→S X 3の変遷が判明した南カマド群とがある。このカマド群は、それぞれ17世紀後半代～18世紀前半代の遺物が出土し、①期もしくは②期大庫裏に伴うものである。北側カマド群についてはS X 2が①期、S X 1が②期大庫裏に伴い、南側カマド群については最も先行するS X 6が出土遺物から①期大庫裏に伴うと推定されるものの、S X 5以降の時期は判然としない。

今回調査した大規模カマドS X 51とそれに付属する小カマドS X 52は、③期大庫裏建設時に釜屋が独立して新設された際に築造されたものである。さらに善導寺の記録を見れば、S X 51は天保3年(1832)に一度修築を受けていることから、その時に小カマドはS X 53へと改造されたと考えられる。

その後S X 51・53は、埋め戻されてその上に煉瓦造りのカマドが築造される明治後期、恐らくは明治45年の大改修時に至るまで約150年の間使用されたと考えられる。これにより、江戸時代～明治時代の善導寺におけるカマドの変遷が判明したことは大きな成果であった。

なお、釜屋の土間面で痕跡のみが検出されたS X 54～56については、簡便な造りと推定されることから、臨時的に設けられたカマドと想定したい。

下層検出遺構については、溝S D 63や土坑S K 60が出土遺物から①・②期大庫裏の時期と推定されるが、土坑S K 61については遺物が全く出土せず、その時期は不明である。



第28図 復元されたカマド

報告書抄録

ふりがな	ぜんどうじけいだいいせき だい3・4 じちょうさがいようほうこくしよ							
書名	善導寺境内遺跡 第3・4次調査概要報告書							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第261集							
編著者名	水原 道範							
編集機関	久留米市 文化観光部 文化財保護課							
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL. 0942-30-9225 Fax. 0942-30-9718 E-mail : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2008（平成20）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査の原因
ぜんどうじけいだいいせき 善導寺境内遺跡 だい3次調査	くるめし 久留米市 ぜんどうじまち 善導寺町	40203		33° 19′ 49″	130° 36′ 16″	2006.11.20 ～ 2006.12.20	267m ²	文化財寺院 建造物保存 修理
だい4次調査	いいた 飯田					2007.4.4 ～ 2007.6.1	132m ²	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
善導寺境内遺跡 第3次調査	寺院	江戸～ 明治	建物 1棟以上 便所 1基		陶磁器 瓦 土師器	善導寺の本堂と広間を結ぶ 渡り廊下、及び便所の基礎工 法調査		
第4次調査		江戸～ 昭和	カマド 6基 溝 1条 土坑 5基		銅製品 銭貨	国指定重要文化財建造物善 導寺釜屋の地下遺構を調査。		
土木工事の届出	平成18年10月27日（第3次） 平成19年3月23日（第4次）			遺物の発見届日		平成18年12月26日（第3次） 平成19年6月7日（第4次）		
調査成果の要約								
（第3次調査）本堂と広間を結ぶ渡り廊下の調査の基礎工法調査。「明治15年伽藍取調書」に描かれた玄関を持つ渡り廊下前身建物の痕跡を検出し、現在の渡り廊下が明治15年以降に建築されたものであることが判明。また、昭和初期まで使用された便所遺構も調査を行った。								
（第4次調査）釜屋の地下遺構調査。基礎工法調査時に検出された江戸時代中～後期の大型石組カマドの他、土坑などを検出。さらに下層からは釜屋が建設される以前の石組溝や土坑などを検出した。								

善導寺境内遺跡

第3・4次調査概要報告書

久留米市文化財調査報告書 第261集

平成20年3月31日

発行 久留米市教育委員会

久留米市城南町15-3

編集 久留米市文化観光部文化財保護課

印刷 香和印刷株式会社